

平成30年10月26日(金)

老球の細道444号

下馬評を克服する

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今週末、高校バスケットボールウインターカップ(選手権大会)県予選が郡山市において開催される。今年の福島県高校バスケットボールはインターハイ県大会、県総合体育大会の二つの大会で男女とも優勝チームが異なった。今回のウインターカップではどちらのチームが勝つのか、はたまたダークホースの第3のチームがアップセットを起こすのか色々な下馬評が私の周囲において飛び交っている。

そもそも「下馬評」とは、由来は江戸時代にある。訪問者が城に入る際に下馬(馬から降りる)する場所で、主人が返ってくるまでの間にお供がした噂や評判のことを「下馬評」と言った。ここから、直接事柄と関係のない人の噂を表すようになったという。バスケットボールにおいては、下馬評とは対戦相手によって変わる自分のチームに対する認識である。「期待要素」とも言われる。

下馬評によって選手は早いうちから自チームの評価を自分で決めつけてしまうことがある。真相も知らない門外漢の批評なのに。その下馬評を克服するのは容易ではない。特に選手がその下馬評を信じ込んでゲームに臨めば、がんばれば勝てるゲームを最初からあきらめたり、その逆に相手を甘く見て足元をすくわれ負けてしまうことがよくある。山本リンダは「噂を信じちゃいけないよ♪」と名セリフを残したが、コーチ、選手は「下馬評を信じてはいけない」。当たり前のことであるが、ゲームは始まるまでは何が起こるかわからない、終わって見なければ勝敗はわからない。

下馬評が高い場合コーチがすべきことは、自分のチームの選手が優れていることを強調すること。具体的に何が優位なのか説明する(経験、態度、スピード等)。それが真実かどうかは関係ない。大事なことは選手達に本気でそう思わせることである。コーチがしてはいけないことは、今までの伝統や歴史などを勝つための理由にすること。過去と今は違う。実力は1日で変わる。また、その対戦相手と戦った自分と同じレベルのチームを比較すること。「N理論」と言われるが、BチームはAチームに10点差で負けた。私のチームはBチームに20点差で勝った。だから私たちはAチームに勝てる。そのチームがどのような準備して戦ったのか知らないのだから、比較するのは危険である。

下馬評が低い場合コーチがすべきことは、チームが優位になれることを特定し、それをコントロールできれば勝てると選手に強調すること(ディフェンスリバウンド等)。そしてアップセットを起こし、相手チームと周囲の関係者、観客を黙らせる楽しさを教える。スポーツのゲームで最高の快感は、アップセット、ミラクルを起こし皆を黙らせることである。コーチがしてはいけないことは、過去の敗戦を持ち出さないこと。選手たちのモチベーションを上げるのは、試合中の一つ一つのプレイに集中させること。

下馬評が高くても低くても、チームがどうしたら勝てるかを具体的な行動や戦略を示す。過去の結果は話さない。チームを優位に立たせるためには、必ず物事には逆の立場があることを話す。相手よりサイズで劣る場合は小さい方が有利な状況を強調すること。実際に有利であることよりも、コーチが有利な状況を作ってやり、選手に信じ込ませること。

ゲームは強い者が勝つのではなく、勝ったものが強いのである。